

# あいのて

平成27年1月20日発行

発行：京築教育事務所

人権・同和教育室

TEL：0979-83-3602

FAX：0979-83-3606

タイトル「あいのて」は、がんばっている人には絶妙のタイミングで“合いの手”を入れる、困った人には“愛の手”を差し伸べることができる、そんな人権・同和教育室でありたいと願ってネーミングしました。

## はじめに

8月26日(火)に「『個別的な人権課題』指導力アップ講座Ⅱ」がおこなわれました。今回の講座では、「解放令」以降の歴史について、6年社会科教科書(上)の内容を中心にポイントを整理していきました。講座の概要と参加者の皆様からいただいた声を下に紹介します。

9月3日(水)には平成26年度教頭人権教育研修会がおこなわれました。今回の講話では、立花高等学校の齋藤真人校長先生を講師に招き、不登校生徒の自立支援の具体的な実践にもとづく共感的理解について多くのご示唆を頂きました。その講話の内容を見開きに紹介します。

最終ページには、「教職員用学習資料 ハンセン病を正しく理解するために」についての内容や、京築教育事務所のホームページより人権・同和教育室の情報について紹介いたしております。是非、ご一読ください。

齋藤校長先生からは90分のご講話をいただきました。すべて紹介したいところですが、紙面の関係で抜粋した内容のみをご紹介します。



## 平成26年度特別研修会(平成26年8月26日)

### 「『個別的な人権課題』指導力アップ講座Ⅱ」

前半は「『解放令』以降の部落史について」の講義をおこない、後半は「子どもたちに『同和問題』を正しく理解させるために」の演習を行いました。そのポイントと参加者のアンケートを紹介します。

#### ●前半のポイント

- ◇講座Ⅰの資料をもとに、「解放令」までの部落史について「中世における排除とケガレ意識」と「近世における差別的な政治的・制度的な成立」にポイントを絞り、大まかな流れを振り返った。
- ◇「解放令」以降の部落史について、「社会問題としての部落差別の成立」と「戦後の部落問題解決に向けた取組」を柱にして、研究者が執筆した書籍等から引用した資料をもとに説明を行った。

#### ●後半のポイント

- ◇6年生社会科の教科書でおさえるポイントについて、「解放令」と「水平社宣言」の学習活動例を紹介した。
- ◇マンダラシートを活用して意見交流を行い、子どもたちに「同和問題」について正しく理解させるための内容や方法をグループで見出すワークショップを行った。

#### ●アンケートより

- 前回の研修とあわせて、今回で2度目の人権の研修会でした。今まで差別や部落などの言葉を知っていましたが、歴史の中だけのものとして考えていました。しかし、現代においても人権問題は大切なものであるし、演習を通して多くの意見や解決の方法を知ることができてよかったです。
- 差別がどのように社会の中で形成されてきたのか、また差別に対して今までどのような対策がとられてきたのかについてわかりやすい説明で整理ができました。
- 歴史学習を進める時に、教科書の文をただ追うのではなく、資料等を使って背景を読み、当時の人々の様子、気持ちを考えさせることが大切であると感じました。同時に現在の自分にできることはないか、道徳や人権学習とも関連づけた指導ができるように資料の活用や活動の工夫をしていきたいです。
- 「部落史」は昔の話ではなく、現代の人権学習や日頃の子どもの同士の人間関係にも関係しているように思いました。小さなことから、取り組み、子ども達の人権感覚を育てたいと思いました。演習で先輩の先生の話をおきかたは貴重な時間となりました。
- 以前学習した内容を今一度振り返ることができました。継続して学習していく必要を感じました。正しい知識を身に付けることでおかしい事に気づける生徒を育てたいと思います。
- 6年を担任したときに歴史学習をどう取り入れればよいか悩んでいました。今日は部落差別の歴史と実際の授業例について教えていただき、とても勉強になりました。



講師：学校法人立花学園 立花高等学校 校長 齋藤 真人 氏

## 問われているのは子どもではなく周囲の大人



200日学校を休んでいても生きる力を育てている子どもはたくさんいます。その反対に1日も学校を休んでいなくても心が完全に折れてしまっている子どももいます。障害と診断を受けた子どもの中にも豊かな感性をもっている子どもはたくさんいます。でも健康者と言われる子どもの中には、障害をもった子どもをいじめてしまう子どももいます。言えることは、どちらの子どもも親御さんにしてみれば愛おしい子どもたちで、第三者の大人からどちらが良いとか悪いとか決めつけられてはたまったものではないということです。

本校の生徒に入学試験の感想を聞いてみると、「3年ぶりに鉛筆を握ったら重かったです」と答えた男子がいました。大人はこの子どもが3年間も学習しなかったことを嘆きたくります。それはそうだろうと思います。でも、ちょっと見方を変えると、そんな子どもが高校生になりたいと思って一生懸命入試に来ているのを「おおっ、あんた今日よう頑張ったね」と言ってあげたら、その子どもはどんなに助かるでしょうか。問われているのは子どもたちがどんなに頑張っているかではなくて、子どもたちのほんのわずかな頑張りに周囲の大人たちがちゃんと気づいてあげているかどうかだと思います。

## 25色目の絵の具とは？

何か問題があると、「あそこの家庭はもっと親が考え直さんと」と、つい家庭のせいと終わっていないでしょうか。不登校になってしまった理由が分からないから、親御さんは苦勞しておられるのに、「あんたのそれがいかんとよ」と言われて、だれが「はいわかりました、がんばります」となるでしょうか。

ここで、いろいろな学校や家庭が施しておられる教育とかしつけとかを、24色の絵の具を使って絵を描いている作業に例えてみましょう。特にお母さん方は、「うちはこれでいいのだろうか？」と自問自答されながら子育てをされているのだと思います。だから私はいつも、「間違ってる方なんて一人もいません。24色の絵の具そのまま持ち帰って下さい。絵の具を新たに買い換える必要なんてゼッタイありませんよ」と言います。すると本当に悩んでおられるお母さん方はここで泣かれます。さらに、「間違いなんてありません。そのまま結構ですよ」と言うとお母さん方はぼろぼろ泣かれます。



本校では、「せっかくのご縁があったのだから、25色目を新しく持ちましょう」と共通理解しています。大変思い切った言い方になるかもしれませんが、25色目というのは『逃がしてあげる勇気』言いかえれば、子どもに限界がきていることに気づいてあげる『大人サイドのゆとり』なんだと思います。大人がこの一色を持つことで目の前の生徒に何かいい変化が起こるならば、うちの生徒たちが不登校に悩んで苦しんだ過去というものがやっと意味をもって、何か社会に問いただしていきような気がするんです。不登校になりたくてなった子どもなんていないんです。

## 目を背けてはならないアンケート結果

「日頃お子さんにどんな言葉をかけていらっしゃいますか？」というアンケートを中学校で実施したところ、「早くしなさい、勉強しなさい、片付けなさい」など「〇〇しなさい」言葉のオンパレードでした。唯一「□□どうだった？」言葉が会話のキャッチボールになっているように見受けられますが、大人の不安の裏返しから発せられるものが多かったのです。「勉強について行けた？いじめられなかった？何も嫌なことなかった？」というのは、残念ながら子どもの心の琴線を震えさせる声かけではありませんでした。

ある中学校で講演した際に生徒が書いてくれた感想文がこのことをとても分かりやすく説明してくれています。その生徒は、良いテストの成績を持って帰って母親を喜ばそうと思い走って家に帰ったそうです。「ただいま。お母さん！あのね」と言いながら母親のそばへ駆け寄りました。そのときの母親の一言はまさに、母親側の優先順位で、「外から帰ったらまずうがい、そして手洗いやろうが」でした。よくある話だとは思いませんか。

この生徒は感想に、「お母さんを喜ばそうと思って走って帰ったのに、何故怒られなければならなかったのだろうか。ばかばかしくなってまだ成績は見せていません」と書いていました。

母親にしてみれば、うがいや手洗いは大切なので、先に言ってしまったのですが、



生徒はテストの成績を褒めてもらいたかった。もしこの時、「あら、あんたようがんばったねえ。」が先ならば、その後の「うがい・手洗いをしなさい」という言葉もスッと子どもに伝わったかもしれません。

私達はこのアンケート結果から目を背けてはならないと思います。同じような事象はたくさんあると思うのです。大人でさえ、家庭や職場の中で「〇〇しなさい」という言葉を浴び続けると、「ああっ、今日も一日楽しいな」とは思えないはず。厳しく、きちんと育てていくことは必要ですが、その前に一つ大事なことがあることをこのアンケート結果から感じとっていただきたいと思います。

## 自尊感情や自己有用感を育てるために



福岡市内の6～7割の公立小学校の研究紀要には自尊感情、自己有用感、自己肯定感、自己存在感、という類いの言葉が出てきます。今こそ日本の子どもたちにそれらを身につけさせることが必要です。それにはまず『当たり前』という前提を捨てるのが大切です。ゼロをベースに考えると、子どもたちが頑張っているのが当たり前でなく、いかに頑張っているかが見えてきます。

例えば週に一日しか学校に来ることができない生徒がいたとすると非常に悩ましい存在だと思えます。でもよく考えてみるとこの生徒は週に一日来ることができているのです。学校という所は毎日行くというのが『当たり前』という前提で見てしまいがちです。しかし、ゼロをベースに考えるとこの生徒は一日来ることができています。どちらの考えが正しいかを比較論するつもりはありません。皆さんに気づいていただきたいのは、一日しか来ていない子どもとか、頑張って一日来ている子どもとかを決めるのは、私達大人であるということです。子どもたちを取り巻く事実はまだ一つだけです。週に一日学校に来ているという事実がそこにあるだけです。あとは完全に大人の解釈なんです。ですから本校の職員室で一番大切にしていることは「出来ないことを嘆くのではなくて、出来たことを認めてやろう」ということです。

分かりやすく『あいさつ』を例にとり話しますと、最近本校は「あいさつがいい」と褒められます。通常子どもに「あいさつをしなさい、あいさつをしなさい」というのが学校の取組です。誤解を恐れず申し上げますと、「あいさつをしなさい」という指導を立花高校ではしていません。本当に大切なものならばわれわれからあいさつをすべきです。本校の教職員は、出勤中生徒を見かけたら、わざわざ車を止めてでも声をかけています。教職員があれ程生徒にあいさつしたら、生徒もするようになります。それだけ本校の教職員は生徒たちに声をかけています。では何故それだけ声をかけるのか、なんの術(てら)いもなく理由を言うと、本校の教職員は生徒たちが愛しくて愛しくてたまらないのです。入学式前に全校生徒の情報をずっとたどっていきませんが、一人一人がくぐってきた壮絶な過去というものを頭に入れていきますと、とてもじゃないけどその生徒たちが学校に向かって歩いている姿を見るだけで泣けてきます。何故か本校の教職員は誰一人それを当たり前と思っていない。あの生徒たちが今日も頑張っている学校に来ていると思えばこそ、声かけも変わってくるのです。

## 100回の「頑張れ」よりも、1回の「よう頑張ろうね」

近所のお婆ちゃんからある日、一本の電話があって「昨日お宅の生徒が…」と言うから、「また謝罪に行かないといけないかな」と思っていたら、「バス停で気持ちのいい挨拶をしてくれてお陰で一日中気持ちよく過ごせました。ありがとうございます」という電話でした。すぐに全校放送かけて「今こげんな電話があった。誰か分からんけど、こん中の誰かやろうが。嬉しかったぞ。今まですまんかった。先生たちの仕事は、あんたたちの良さを誰よりも理解してあんたたちを守らんといかんのに、地域社会のプレッシャーに負けて、一緒になってあんたたちを非難していた。つまらん、つまらんって言われてよう我慢しよったね。本当にすまんかったね。はじめて褒められたたい。嬉しくてたまらん」と告げると、けなげにも全校生徒200人が拍手したんです。

「ちゃんとしなさい」と言い続けた我々の100回の声かけは1回も生徒に届いてないんです。あの近所のお婆ちゃんの本一の電話からうちの学校の変化は生まれたのです。100回「頑張れ」よりも、1回の「よう頑張ろうね」の方がはるかにエネルギーが届く気がします。これこそ「あっ、この人は俺が頑張っていることをちゃんと見ていてくれる」という共感的理解であり、自己有用感を育むところなのです。

「頑張れ」と言ったらいかんという事ではなくて、それまでの頑張りを認めた上で適切な場面で声をかけるということなんですね。我々は二言目には言ってしまいます。「頑張ってください」「がんばれ」。我々は教育に携わる者として、子どもたちに頑張ってもらいたいと願っています。でも私たちが絶対に気づくべきは、「あの子どもたちがすでに頑張っている」ことだと思えます。



# ご活用ください！京築教育事務所のHP

京築教育事務所では、今回、ホームページを更新しました！！好評を得ています「あいので」のバックナンバー（第1号から第7号）も、すべてアップしていますので、ご活用ください！！



人権が尊重される10の視点シリーズ「授業づくり」「環境づくり」や「授業づくり虎の巻」も、こちらからダウンロードできます！

- 第1号 「人権問題に関する県民意識調査から」  
「人権教育指導者用 手引きⅡ」
- 第2号 「人権が尊重される授業づくり10の視点」活用例  
「教師が身につけたい授業の力『目指せ、ほめ達人』」
- 第3号 「人権が尊重される環境づくり10の視点」  
「教師が身につけたい授業の力『きく』」
- 第4号 講話「これからの人権・同和教育の実践～キーワードは『自尊感情』～」 大阪教育大学特任教授 園田雅春氏  
「教師が身につけたい授業の力『話す』」
- 第5号 講話「コミュニケーションの危機と人権教育の可能性」  
公益社団法人福岡人権研究所 事務長 谷口研二氏  
「教師が身につけたい授業の力『みる』」
- 第6号 「平成25年度人権教育推進状況調査より」  
「体験的参加型学習の活用事例『マンダラシート』」
- 第7号 講話「学びでつながる学習集団づくり」  
大阪教育大学 非常勤講師 土田光子氏

## ハンセン病について、正しく理解していますか

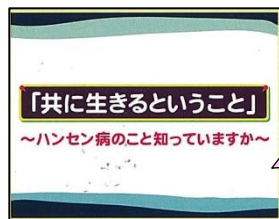
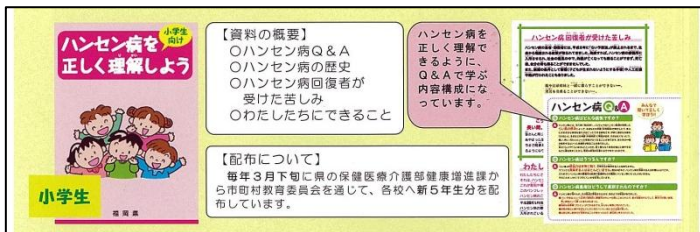


昨年、福岡県内のある小学校で、「ハンセン病」について人権学習を行いました。しかし、教師が十分、ハンセン病について理解していなかったことから、子どもたちに誤解を与えるとともにハンセン病元患者の方を深く傷つけてしまいました。

子どもたちと個別的な人権課題の一つである「ハンセン病問題」について学習することはとても大切なことです。そのためには、まず私たち教職員自身が「ハンセン病」について、正しく理解しておくことが大切です。

そこで、福岡県では、教職員自身がハンセン病を正しく理解するためのきっかけとなるよう、「ハンセン病を正しく理解するために【教職員用学習資料】」のパンフレットを作成しました。是非、ご一読ください。

また、京築教育事務所では、ハンセン病についての研修も要請研修でサポートさせていただきます。



児童生徒向けの資料や教材、映像資料等も紹介しています。人権学習や校内研修等で活用してください。

先生方へ 正しい人権感覚を持って子どもたちに正しい認識を持たせてください。そして差別の連鎖を断ち切ってください。～ 志村 康さん（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会長）～

大人の与えた偏見や先入観によって子どもは間違った認識を持ってしまいます。そのことが次の世代へ差別を残すことになるのです。この差別の連鎖を断ち切るのに、学校教育は大きな役割を担っています。その大きな役割を担っているのだという自覚と誇りを先生方には失わないでいただきたいのです。先生にしかできないこと、先生だからこそできることがあります。そして、ご自身の言動が子どもたちの人格形成に大きな影響を与えているのだということを、決して忘れないでいただきたいと思います。

※「ハンセン病を正しく理解するために」より抜粋